

# 高齢者・障害者・病人支援をめぐる社会学的研究

——ハンセン病問題に焦点を当てて——

## Sociological Research on Social Support for the Aged, Handicapped or Chronically Ill: Focusing on the Issue of Hansen's Disease

プロジェクト代表者：福岡安則（教養学部・教授）

Yasunori FUKUOKA (Faculty of Liberal Arts, Professor)

### 【研究の経過】

2006年度は、日本の各地に存在する国立ハンセン病療養所を訪ねることを中心に、入所者、退所者あるいは家族のひとたちからの「聞き取り」調査を精力的に実施した。5月の「沖縄愛楽園」調査（山崎敬一代表の科研費）を皮切りに、プロジェクト経費によって、都下の多磨全生園、瀬戸内の長島愛生園・邑久光明園を訪ねて、入所者のライフストーリーの聞き取りをおこない、さらに、兵庫県尼崎市、福岡県豊前市、鳥取県北栄町、熊本市を訪ねて、退所者や家族からの聞き取りをおこなった。

調査研究費が圧倒的に不足していたので、そのほかに、熊本県から人権問題の講演に2回招かれたおりに退所者からの聞き取りを実施したり、草津の栗生楽泉園、瀬戸内の大島青松園を私費で訪ねて、入所者からの聞き取りをおこなったりした。

### 【研究方法の特色】

一般に、研究には、「理論研究」「実験研究」「野外研究」の3種類があり、私のような社会学的立場からする実証研究は、フィールドワークを中心とする「野外研究」の典型である。日本各地をどれだけ動き回ったか、どれだけ「聞き取り」に専念できたかが、調査研究結果の成否を分ける。

「聞き取り」調査の一般的手順を説明しておけば、以下のとおりである。

- ① 丁寧な「聞き取り」をする。——通常、1人の語り手にたいして、少なくとも2時間ないし3時間の聞き取りがおこなわれる。わたしがやった聞き取りの最長記録は、2日がかかりで8時間におよんだ。と思ったが、これは1回限りの聞き取りの最長記録であった。1人のひとに、断続的に6回の聞き取りをさせてもらったこともある。
- ② 丁寧に「テープおこし」(transcript)を作成する。——最近やったものでは、5時間の録音を文字にしたら、約8万字となった。根気がいり、くたびれる作業であるが、この作業がいい加減であれば、聞き取り自体がうまくいっていても、データは台無しになる。
- ③ 「テープおこし」の資料を、必要最小限の範囲で編集することで、読めばわかる (readable) ように整理する。——プライバシー保護のために、とりあえず名前だけは仮名 (fictitious name) にしたりする。また、「聞き取り資料」を読み解くのに必要な情報などを、脚注に打ち込む。さきの「約8万字のテープおこし」は、この作業によって、約5万字となった。
- ④ 「語り」を活かしながら、多少とも分析的な「ケーススタディ」(case study) のペーパーにまとめていく。

⑤ 以上のところだけでも、途方もなく、根気のいる作業である。しかも、そういった「聞き取り」の事例研究を何十と蓄積することによって、その、豊穡なデータから浮かび上がってくる構造的な問題を読み取ることによって、調査の最終成果ができあがっていく。

### 【事例】

以上のような「研究方法の特徴」からして、現時点ではまだしかるべき「研究成果」はない。とはいえ、以下に、上記の④の段階まで作業が進んだ事例の要約を呈示しておこう。これは、「ハンセン病市民学会第3回交流集会」（群馬県草津，2007.5.13）で、本学の非常勤講師でもある黒坂愛衣さんと共同報告したものである。

#### 子どもが差別を受けたことがいちばん悲しい

##### ——ハンセン病療養所退所者の60代男性からの聞き取り——

ハンセン病療養所退所者のひとりである60代男性Kさんの聞き取り事例。

Kさんは、九州地方で1943年に生まれた男性（聞き取り時点で63歳）。12歳のときに足の一部の皮膚の異常に気づき、大学病院の診断を受け、14歳のときに菊池恵楓園に入所。その後におこした「らい反応」の影響で、顔に後遺症がのこった。

毎年の菌検査で「菌は1回も出ないかった」Kさんは、「社会復帰をしたいと〔園の医師に〕願った」。しかし、医師からは「『まだダメ』と何回も押さえつけ」られた。Kさんは20歳前後のころ「無断で〔園を〕飛び出」す。——以後、2003年に正式に退所手続きをとるまで、Kさんは、園に籍を残したまま「社会」で仕事をみつけ働くという「行ったり来たり」の生活を、35年間以上つづけた。

32歳のとき、園内で知り合い結婚した妻が2度目の妊娠。最初の妊娠のときは、園側からの働きかけで「強制的に墮ろさせられ」た。こんどは「ぜったい子どもつくる」というKさん夫妻の願いに、園の職員は「ここを出なさい。生活は〔園の〕外でして、籍は置いときなさい」と言った。Kさんは身重の妻を連れて園を出た。

恵楓園のちかくに土地を買い、家をつくった。その後の生活のさまざまな場面で「差別」がついてまわった。——近所に「恵楓園のひと」と言いふらされた。就職先では「恵楓園のひとだから」と給料を少なくされた。腰痛で行った病院では「恵楓園に行けばいい」と言われた。役場職員に「まともな顔しとらん」と言われた、など。床屋や銭湯の利用にも“嫌われとりやせんか”と思い、自宅から遠くの店に行く。近所とは「あいさつ程度」のつきあいにとどまる。

聞き取り時点で30歳になるひとり娘は、小学校の入学式の時、怪我をして泣いて帰ってきた。「『らい病ン子げな』とか言われたて」。小中学校時代、親の目からみて「友達はほとんどいなかった」。Kさん夫妻は抗議せず、「ひかえめ」にしていた。運動会にはいちども行ったことがない。町外の高校に進学すると、「ほんとの明るい子に」なり、家に友達を連れてくるようになった。23～4歳の頃、恋人を家に連れてきたが、「お父さんの顔見て、びっくりした。付き合いはやめる」と言われ、破局した。これがもとの、Kさんは2002年に、妻子との離婚を決意。それは「子どもン将来のため」の離婚であった（妻には後遺症がなかった）。

Kさんの語りは、療養所の外での日常生活のさまざまな場面で、ハンセン病にたいする差

別・偏見が、ことあるごとに、退所者（およびその家族）の暮らしを脅かし続けてきたことを、如実に物語っている。とりわけ、子どもの幸せを願うがゆえに妻子との別離を選ばざるをえなかったという、つい数年前の出来事は、ハンセン病にたいする差別・偏見が、当事者の家族どうしのつながりを奪うものであり、しかも《いま現在の問題》であるということ、わたしたちに教える。

### 【slow research】

料理に fast food と slow food があるように、研究にも fast research と slow research というものがあるとすれば、わたしのやっている調査研究は、明らかに slow research だ。したがって、たった1年間というタイムスパンで「研究成果」を求められる、しかも、わたしは2006年度のプロジェクト研究経費として2,000千円を申請したのに、わずか350千円の経費が認められただけで、その「1年間の研究成果」を、4ページ以内とはいえ、「報告書」として提出せよ、と求められると、たいへん戸惑う。というか、わたしの貴重な時間を奪わないでほしい、と思う。

わたしが研究者として怠惰ゆえに、こういうことを言う、と受け取られると心外なので、わたしの研究スタイルをもう少し説明しておきたい。

わたしが「博士（社会学）」の学位を取得した研究は、1988～89年度に980万円の補助をいただいた科研調査で、「在日韓国・朝鮮人」からの「聞き取り」調査である。自分なりに納得のいく研究成果をまとめられたのは、やっと、1993年に上梓した『在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ』（中公新書）においてである。この本は、14刷、75,000部という、ちょっとしたベストセラーになった。そして、さらに研鑽をつんで、英語の本、*Lives of Young Koreans in Japan* (Melbourne: Trans Pacific Press) として出すことができたのは、2000年である。

このほかにも、わたしは、人並み以上の著書を書いていると、自分では思っている。『マルクスを〈読む〉——疎外の論理と内化の論理』（三一書房、1979）、『マスコミと差別語問題』（共編著、明石書店、1984）、『現代社会の差別意識』（明石書店、1985）、『被差別の文化・反差別の生きざま』（共編著、明石書店、1987）、『同化と異化のはざままで——「在日」若者世代のアイデンティティ葛藤』（共著、新幹社、1991）、『ほんとうの私を求めて——「在日」二世三世の女性たち』（共著、新幹社、1991）、『現代若者の差別する可能性』（明石書店、1992）、『在日韓国人青年の生活と意識』（共著、東京大学出版会、1997）、『聞き取りの技法——〈社会学する〉ことへの招待』（創土社、2000）、『とちぎ発〈部落と人権〉のエスノグラフィ Part 1——部落へ飛び込む』（共著、創土社、2003）、『とちぎ発〈部落と人権〉のエスノグラフィ Part 2——出会い、ふれあい、語らい』（共著、創土社、2003）、『とちぎ発〈部落と人権〉のエスノグラフィ Part 3——個と出会う／部落と出会う』（共著、創土社、2004）——これらの著書である。いずれも、fast research としてではなく、slow research の成果である。

そういう意味では、埼玉大学においても、時間をかけてはじめて研究成果が熟成してくるような研究スタイルを大事にする研究環境が大切ではないかと思う。ここ数年、その意味では、研究環境の劣化が進行しているように思えてならない。

### 【研究成果の見通し】

幸い、わたしは、2007～2010年度の4年間、「市民社会のなかのハンセン病問題——家族・社会復帰者・再入所者のライフストーリー」という研究課題名で、科学研究費補助金（基盤研究（C））が取れたので、今回のプロジェクト研究は、そこに継続していくことが可能になった。研究成果も、2010年度の末までには、おおよそのかたちを示せるところまで、粘り強く調査研究を進めていきたいと考えている。